

南方（フィリピン）

比島遁走記

東京都 水野 稔

——初めに軍歴をどうぞ。

昭和十七年まで内地にいましたが、昭和十八年の一月、満州の孫呉の戦車隊に召集になりました。

一旦、戦車要員全員が福岡に集合し、朝鮮経由で一月十五日に黒河省の孫呉に着きました。第四四〇部隊（戦車第一五連隊）でした。

部隊の編制は第一中隊、第二中隊、第三中隊の三個中隊編制でした。

戦車は九七式戦車が主体で、十七トンの重量で四十

八ミリ戦車砲と機関銃一丁を備えています。

初年兵教育が終わり一期の検閲が済むと、その年の九月に部隊にアンダマン島守備の命が出て、船でサイゴンに向かい、部隊全員がサイゴンに上陸しました。

サイゴンにしばらく駐留している間に、幹部候補生の試験があり、六名が甲種幹部候補生に合格しました。部隊は六名の幹部候補生を残しアンダマン島へ出発し、私達六人は奉天省四平の陸軍戦車学校へ入校するためにサイゴンを離れました。

十二月二十五日字品に着港、輸送司令部に出頭したところ、入校予定の一月二十日までに四平の学校に着くようにとのことでした。幸いに六人の仲間は東京、千葉、山梨の生れなので輸送指揮官が気をきかし、一月七日、東京駅集合ということ一旦別れました。

当時、家もまだ焼かれておらず、サイゴン土産の乾燥バナナ、黒砂糖、ビスケットをお土産に差し出し大喜びされました。家族と記念撮影を撮り十日間程休養させて貰いました。一月七日に、東京を発ち門司―釜山を過ぎ四平に一月十三日に到着しました。

——戦車学校の訓練はどうでしたか。

特訓の一言です。

九四式中戦車（十二〜三トン）で四人乗りです。

五十七ミリ戦車砲と戦車用重機、それに通信器を備えていました。

戦闘時の編成は、連隊本部―連隊長、副官車、指揮班車が命令の中枢神経です。

これに三個中隊がつき一個中隊は三個小隊で一個小隊は三両から成り立っています。

この他、整備中隊があり戦車三両とトラック五台を持っていました。

まだまだ軽油が豊富で、演習も訓練も充分できました。故障が多いのには閉口しました。戦闘中、故障が起きたらなどの不安がありました。連隊の演習は壮

観なもので、アメリカ軍何するものぞと意気天を衝きました。

八か月で卒業、それぞれ原隊に復帰命令が出て、当然私にも原隊追及の命ができました。

——原隊に復帰できたのですか。

アンダマンの第四四〇部隊への追跡ですが、当時の輸送の状況から不可能だったのでしょう。第四四〇部隊の本隊である習志野の戦車第二連隊に預かりの身となりました。

その中、世田谷の方で南方へ行く部隊の編成があり、我々六人の見習士官もそこに転属になりました。

これから身分上、彷徨の身となったのです。門司で九隻の輸送船で船団を組み、駆潜艇四隻、駆逐艇一隻が護衛につきました。

夜中に出航、玄界灘に出ました。私達見習士官は交互に見張りに当たりましたが、済州島付近で敵潜水艦の攻撃を受けて一隻沈没してしまいました。

雷跡を避けながらのジグザグ航進です。幸いにして機上からの攻撃はありませんでした。一隻だけの犠牲

で高雄に寄港しました。

高雄から島沿いに比島へ向かいました。勿論西岸沿いに南下していくのです。アメリカの反撃甚しく船団はバラバラになってしまいました。

私達の乗った船もマニラまで行けず、北サンフェルナンドに上陸しました。空船になった船がマニラへ行く途中、二隻撃沈されてしまいました。

北サンフェルナンドからタルトラックークラック、マニラへ行軍して行きました。

マニラで部隊は解散し、原隊復帰の命を受け兵站部で待機していました。

十月十五日、原隊復帰が不可能と判明、第四航空軍司令部（マニラ）に転属になりました。その時の第十方面軍の司令官は山下大将でした。六人の見習士官は司令部の各部に配属、私は無線による情勢の伝達を行いました。

その時、情報の裏表がよくわかりました。わが〇〇部隊は全滅したという事実は「軽微の損害を受けて某方面に転出せり」となり、それが大本営への報告とな

る。

わが対空射撃により敵一機を撃墜した事実が「敵十数機撃墜せり」との誇大発表となる。これでは大本営情報部もたまったものではない。まして何も知らない国民は悲惨です。

その時、下士官、兵の食事は一汁一菜、将校はそれに一菜、参謀は二菜つく程度です。

アメリカ軍は圧倒的な陸海空の兵力をもってミンダナオ島、レイテ島を陥れ、北上を開始してきました。

一月十五日から艦砲射撃によりコレヒドール島を攻撃、マニラも風前の灯になりました。

——これからアメリカ軍の総攻撃が始まるので
すね。

マニラが陥落してからは組織的な戦闘はほとんどなく各部隊毎に勇敢に抵抗し、反撃、退却のくりかえしで、ジリジリ山の奥に追いつめられていきました。

それより先、航空司令部はいち早く台湾に転属することを決定、ツゲガラオ飛行場から台湾に逃避してまいりました。

残された部隊は兵站監部警備隊に転属した。一月三十一日、少尉に任官。

平地から逐次、山中に追い込まれ、キアンガンを死守しました。

高木少佐を長とする後続部隊に入りサラクサク峠を拠点に警備・看護・修理・兵站の任務に従事しました。

六月に入りサラクサク峠、バレテ峠も激戦の末、守備線が突破されました。その後、アメリカ軍は日本軍の背後に進出したので、高木部隊はスコールを利用し川の葦で遮蔽しながらカガン川を渡河し本隊に合流しました。米軍は日本軍の渡河を阻止するため曳光弾や照明弾で日本軍の渡河点を探していました。突撃・長距離砲・迫撃砲・戦車・火焰放射器、それに土人・黒人を使ってありとあらゆる妨害の連続でした。それに自動火器、軍用犬と想像を超えるものがありました。やっと住民の使用する渡河点を探し出し杭沿いに渡りましたがそれはひどいものでした。渡河後、各峠に小哨が配置されその一つを受持ちました。

いもほりの毎日で、ネズミ・川蟹・雑草、ありとあ

らゆる物を食べ、飢えを凌ぎました。

山下方面軍司令官から終戦の連絡があったのは九月になってからです。兵站部の人々とキアンガンを経てマニラに着いた時は敗戦の気持ちと体力の消耗でひどい下痢に苦しみました。

十一月から復員が始まりましたが、私は体が回復するまで収容所の勤務員募集に応募し昭和二十一年の八月六日に佐世保に復員しました。

一番残念なのは一年以上も苦勞した戦車の腕前を役立たせる機会がなかったことです。実戦ともなれば、アメリカの重戦車の前に一ころだったかも知れませんが。

また、今少し、弾丸があればと思った時もあります。が、今となつては夢のまた夢ですね。